装置

Digitalize 1

渕　言址

言葉の地平

言葉の地平
ガラス板のように底まで覗ける

彼は歌であることをやめた
旋律は別の者が浴びるほど降らせてくれる

イメージ、比喩
それらも形骸化した理論となった

彼はただ
音(おん)と意味を纏っていればそれでよかった

喋ること、語ること、囁くこと
その果てにある想いまでもが単なる事実となった

寄り添うことは彼には慰めではあったろう
だがゆるやかな充足感に包まれることはない

彼の瞑想は自己自身の中に閉じられ
地平線が孤立を包囲する

ディジタルのように瞬間の連続としてのみ許されるもの
今や彼はそれをかき集める、果てしなく

かき集め、そして並べ直し
形になればどのような形であろうとほっと息をつく

言葉の地平
そのガラス板から見える底には
陳腐という名の葬列

彼は呟く
「俺はいつ、あそこに加わるのか」

(2001.9.5)

逆行

自己埋没からの反動に弾かれ
その街の希薄な祈りから
人々の力ない視線にも
僕は生を認めていた？
いや、認めようとしていた…

知ることはあれ
感じることはない
そんな論理的な言語を使い
僕は表現しようとしていた？
いや、ただなぞっていた…

衰退する自己が押し込められ
漠とした圧力の増加に
ふとした弾みで空間を求める――
その瞬間が犯罪としてしか在り得ぬと
一体誰が定義したのか

無数に増殖する振動が
様々な音となり映像となり
五感を惑わせる――
そのような世界に響きうる言葉を
僕は絶望的に探している
(2001.9.9)
歩行するカップ

あらゆる事物が透明で
およそ未知なるものは存在しないかのような錯覚とともに
知りうる全ての情報が透き通って見える――
僕はそんな風景を前に
プラットホームを流れる透き通った人間たちを眺めていた
僕の意識はリズムを欲していた
眺望なき世界に奥行きを与えるリズムを

可塑性を二度と取り戻すことのない
安定的に加熱整形された感情が
わずかな形態と色彩の差異を強調し
大量に歩き回る――

それはまるで、プラスチックカップが
各種の清涼飲料水を湛えて歩いているように見える
その運動差分方程式を見出すのは極めて容易い

自己という液体を
容器から溢れないように慎重に運び
限定された振幅の中で揺れながら
確率に支配されたリズムで歩行を強いられる――――
想うという行為は極めて危険なものとされる
なぜなら、よそ見でもしようものなら
即座にその液体はこぼれ落ちてしまうであろうから…

さらに、もっとも危険な事態
すなわち共振を避けるため
我々は慎重に液体の素材を吟味しなければならない
様々な衝突を、干渉を想定しなければならない
あらゆるケースの流体挙動をシミュレートしなければならない
そのような微妙な平衡状態へ向けて
僕が投じうるどんなリズムがあるというのか

(2001.9.17)

プリオン

無数のCPU細胞の塊がうごめき
情報を媒介として並列処理を行う
人類と呼ばれるそのプリオンは
この星の細胞数を次第に減少させ
自らは、食料を次第に無機体へと転換してゆく

老朽化した建造物
そして疲弊した肉体、いやハ―ドウェア
荒廃した大気、そして大地――――
これこそがこれまでに蓄積してきた全てであり
その維持に、さらにエネルギ―を投入する…

あらゆる時間は蓄積物の維持に費やされ
新たな技術の開発は
さらなる維持エネルギ―の増大をもたらす
この果てしない誤算を修正するCPUはいまだになく
ただ新たな誤算だけが積み上がってゆく

これらを助長する狂騒曲は芸術として認識され
おなじく演算から生産される
プリオンの群れはこれを吸って
新たな破壊と再生の対象を搾り出し
そのメカニズムをアルゴリズム化してゆく

その間にも
生産され、蓄積されたものは老朽化してゆき
維持エネルギーの不足を助長してゆく
さて、このプリオンの群れは
その老朽化に追いついてゆけるのか

(2001.9.19)

あるマインドコントロール途上の悲鳴

防備され
声なき声が集まる———部屋

窓？
窓から何が見えるというの？

無防備な者を追い立てるという欲望
その虜になってゆく

未完成を平気で曝けだす者を突き崩すという欲望
その虜になってゆく

ああ、なぜお前たちは気づかないのか
お前たち自身が生み出したものがお前たちを汚(けが)すのを

ああ、ここには完成された世界があるのだ
気づくがいい、窓など眺める者よ！

ばかげていると知りつつ信じたい
あらゆる疑念を振り捨てることこそは！……くそっ

ああ、僕はひとつひとつの変化に
あまりに鋭敏になりすぎているにちがいない

世界はそのくせ全てを要求してくる
細密化された創造物の増加などに目もくれず

限りない飛翔という時間など
もはや一瞬でしかなく、かつ
そのあとには頭を締め付ける哄笑を呼び寄せる

反駁の余地なき———被造物のかたまり
窓外の世界は我々を必要としてなどいない！

窓？
窓なんて———
ああ、お願い
開けて下さい……

（2001.10.8）

装置

今や
神の被造物としてではなく
人間自らの被造物となった――――人間
これを何と呼ぼう・・・

自らの感覚をもディジタライズし
五感を自らの創造物たる他者に譲り渡し
その他者に操られることで平等を実現しようとする
それは何に対する恐怖なのか

かつては社会という名の他者――――
社会という名の亡霊専制君主が
その五感を抹消し
「死」にさえも無感覚とした時代があった

今もさして変わりはない
亡霊の正体は相変わらずわれわれの中に棲み
我々が崇拝する絶対的神、操縦者であり

我々が創造した他者なのだ

社会は人間性の自由を剥奪したが
今我々の中に棲むそいつは、ある種の自由を推奨する
と同時に、我を信ぜよと叫ぶのだ
まるで我々の医者であるかのように・・・

我々はその治療方針に従い
自らの五感を捨て去り
全ての感覚をディジタライズした上でこれを受容する
「装置」として

その治療の名は「ディジタライズ」
だが、その医者はその治療を「解体」と呼んでいる――
我々はいずれ
それら「装置」の集合体となるのだ・・・

（薬物を多用していた者は
火葬に時間を要すると聞いたことがある
生への執着の度合いに比例するとでもいうのだろうか

それとも神が受け入れるのを渋るためだろうか）

今や
神の被造物としてではなく
人間自らの被造物となった――――人間
これを何と呼ぼう・・・

（2003.10.12）

実験

ああ、なんと味気ない――――現在の生というもの
時間という廊下の上をせかせかと歩くだけのお前
形容すべきなにものもあるまい
無邪気な企みを許さぬ剛直な羅針盤など、どうして要るもんか
あの火焔の欲情、生そのものをも消し去る陶酔は、きっと幻影だったのだ
ましてや、それを産みだすなど――――とんだドン・キ・ホ―テだ

老いさらばえただけなのだろうか・・・

ああ、しかし、老いるとは生を有する者にだけ許される形容だった！
それは、この俺か、それともこの世界か――――確かに、
どちらも同じように、ありったけの補修に補修をかさねている
こんなものが生であろうはずがない
再生に次ぐ再生――――それこそが生ではないか？

俺たちは単なる奴隷でしかない――――奴隷？
それならまだしも、むしろ実験動物でしかない
宇宙が課した、実にちっぽけな実験を
俺たちは飽くこともなく、繰り返している
ある者は、「知の探求」に嬉々として
また、ある者は「無意味」にげっそりと

おお、奇妙なことだ
自らを奴隷と化すために創造され、ばら撒かれた無数の命令者
俺たちの「意思」を囲い込み、塗り潰し、押しのけてゆく者たち
いや、自ら創造したものに取り囲まれていることほど
安心なことはあるまいが、苦笑すべきか
隷属とはこれほどに居心地のよいものであったか

これまで創造してきたあらゆるものの中でも
この磁気ディスクに記録された「命令者」ほど奇妙なものはない
自らを、かつ自ら望むように、「命令」させるという、
そのために創造された、ほとんど固定人格とさえ言える「人格」
それは今やlaboratoryから抜け出して
あそこにも、ここにも、そしてそこにも、目を光らせている・・・

ああ、なんと味気ない――――現在の生というもの
自分の創造物に完全に包囲され
自分自身を、まるごと仮託してしまう――――
そのようなものを、生と呼べるなら・・・
古の創造者よ、このような実験結果は
果たしてお前の予想通りであったか？

(2004.1.5)

流心

次第に遠ざかる雑踏の音声

言葉を浪費することに倦む

「多彩」はやかましい
忘却と手を取り合うことはあるけれど

遠ざかるにつれて拡大するもの
物理的遠近法を逆転させるもの

多様であることがすなわち、
可能性の広がりを意味するなどという幻想

これら無数の創造物は
既にこの星の一部として組み込まれたか

我々創造者を驚かせることのないものも
我々以外の者には驚きを与えるのか

バベルの塔を破壊し、「多様」を発明した
そんな傲慢不遜な創造主など存在しない

巨大な力をねじ伏せる幻想が支配する
それが幻想であることを知る時はいつなのか

雑踏の流心に立つ私から離れ
次第にそれは遠く遥かになってゆく

息苦しさが消えてゆく
焦燥が消えてゆく

(2004.1.17)

リ―ディング

僕は涙を流す
死に瀕した‘ことば’を
静かに発する、そのときに

戦場に投げ出され
葬り去られ

無残に干からびた者たち

全てに権利を認め
放任と自由を与えること
その価値は愚鈍な大衆が決める———

声高に投げつけられ
表現することを強制され
明確な意味を刻むことを強制される・・・彼ら

リングの外で喚きたてる観衆が求めるもの
それは、彼らを使役することだけだ
奴隷のようにこき使うこと———それだけだ

いわばディジタライズされた彼ら
論理的な思考のため、極めて便利化された彼ら
ランボ—よ、君はこのことを予想していたか？

僕ら自身から発せられるためではなく
ある種の媒介物を通じて伝達される———

その目的に沿って再構成された彼らを見よ
それなのに、このリングへと引きずり出され
人間の口から発せられることを強要される
なんと惨めな彼ら

僕は涙を流す
死に瀕した"ことば"が
断末魔の声を上げる、そのときに

(2004.2.1)

自由

懐深い海
自由という海――
その海にも氷の群れが押し寄せるときが来るのだろうか
その恵み深い海の中で

蟻や蜜蜂よりも高度に分化した社会
都市という奇妙な社会の中で暮らす我々を待つ破局

押しのけられ、ぶつ切りにされる"我"
騒音、密度、権利、自由、節度・・・
一見、相反するそれらの連立方程式を解く毎日

混雑を極めた世界を尻目に
孤独であることは不可能だ
そこには孤立と無視があるばかりだ

意識そのものが他者の顔をうかがい
自己を無視して右往左往する
―――我思う、しかれども、我は在らず

譲り渡すしかない・・・
この手に余る、密な不織布(ふしょくふ)のような人間社会を
すべてまるく治める規則的な生活をおくるためには

物理的空間に次々と重ねられるレイヤ―

そのそれぞれに住む我々の分身たち
進化は淘汰を伴うものであるはずなのに

譲り渡すことによってのみ
すべてが可能になる、と・・・
我々はそれを選びつつある

懐深い海
自由という海―――
その海にも氷の群れが押し寄せるときが来るのだろうか

(2004.2.1)

忘却の果て

かつての切ない陽射しが僕をつらぬく
謎のような色彩をまとい
肌触りのない
あまりにほのかで、遥かに遠く―――

しかも濃密な切なさが満ちた陽射し

微小な痛みが全身を快く包む
その傍らを幻のように現れ、そして遠ざかる
解放を切望することを許されぬ―――声、言葉・・・
その一方では
滝のように流れ落ちる粒子が発光する未来へ
逃亡を強要する「時間」という命令者がいる

僕は、どんな近似をも拒絶する！
あらゆるものを呑み込み、仮託し、無数の分身をつくり、
我々を自己疎外へと駆り立てる、そんな近似など
この世界から消してしまいたい
彼奴こそ、愚弄に満ち満ちた麻薬で
我々を腑抜けにしている売女(ばいた)ではないか

この胸に今なお残る、かすかな痛み
絶望を包み込み、涙に溶かし去る・・・痛み
その輻射が僕をつらぬき
自己破壊の果てに我々を呑み込む様を

みじめな滅亡を哀しげに指し示す

(2004.2.6)

或少年の呟き

システマチックな毎日をたどる
全てが有機的な関連性を有する社会
それにもずいぶん馴染んできた
楽しいこともたくさんあって
決して束縛的だとは思わない
しかし
ちょっとだけ感じるのは
想像の余地のないほどに敷き詰められた
「人間」という表示だ
目に見えるものの殆ど全てに刻まれたその表示
ある種の閉鎖的な世界がつくられている

かつて人間は自然に支配されていた

そして、それを支配することを願いつづけていた
今、人間はその夢を失ったのだ
手持ち無沙汰な僕たちには
どんな支配欲が残されているだろう
他民族を支配するなんてつまらないし
社会を牛耳るなんて、もっとつまらない
ましてや神になるなんてばかばかしい
何にもありゃしない
その上、今や「人類」なんて言葉は存在しない
ほかには何もないのだから
自然保護なんて言葉があるくらいだ
畏怖に価するものなんてひとつもない

人間にもそりゃ様々な種類がある
だけど所詮僕と同じ人間なんだから、たかが知れている
いくら携帯でいろんな人とつながっていても
みんな似たりよったりで飽きちまう
その中でシステマチックな社会を作り上げたって
せいぜい軋轢を鎮圧しやすいぐらいのことだろう
尤も、飽和してゆくにつれ

その閉塞感に耐え切れぬ連中が次第に増加するだろうけど
ああ、僕が欲しいのは
支配欲を掻きたてるような相手だよ
畏怖に価するようなそんな相手だよ
社会に飽き足らないわけじゃない
「人間」という無意味な表示ばかりの世界に
すっかり飽きてしまっただけだよ

（2004.2.21）

警告

逃亡は既に不可能である
あなたは様々なセンサーを身に纏っている
それを脱ぐことは――
すなわち自己の存在を消滅させることである
しかし、あなたは自由を求めることが出来る

なぜなら、そのセンサーは無限に長いケーブルを有し
しかも、透明で、羽毛のように重量はなく
あなたの行動を制限することはない

しかもそれらのおかげで
あなたの社会的な存在価値は保証されている
また、ひそかに他人の動静を窺い知ることもできる
もちろんあなたの動静も常に発信され、信頼に寄与している

あなたには様々なサービスが与えられている
あなたの望むがままに情報を得ることも
それをもとに注文や選択をすることもできる
あなたは、わざわざ創造する必要などない

あなたはそれの対価として
社会的ニーズに寄与するための職務を果たす
その結果は社会に反映され、生活水準の向上と
選択の拡大をあらゆる人々にもたらすこととなる

あなたは何から逃亡しようというのだ

そして何ゆえに逃亡する必要があるのだ
自由でありながら、同時に社会的であるためには
これ以上有効な契約が他にあろうか

私は警告する
あなたが自由と呼ぶものが極めて危険な思想であると
あなたは登録を抹消されたその時
私はあなたに対して「非社会的存在」という登録を行うだろう

あなたはその結果、あらゆるサ―ビス対象から除外され
同時に社会的存在意義も失うだろう
それは致命的な結果をもたらすだろう
再び言うが、逃亡は不可能である

(2004.2.28)

冷たい雨

冷たい雨が降り続く

煙草の烟が冷やされる

奥へ奥へとたどり歩く者よ
見知らぬ一点へと歩く者よ

時間は逆行する
己に課すべき何ものもない

抽象的な概念が生きる世界
そこに感情というものはない

見なくともよい
聴かなくともよい

自ら計算した擾乱
その空しさ

自ら創造した戯画
その空々(そらぞら)しさ

冷たい雨が降り続く
煙草の煙が冷やされる

（2004.3.20）

都市の春

南風にゆれる薄紅の花びらを愛で
この都市は人間たちの安堵感を体温とする
ああ、美しい桜、満開の桜
それ以上でも、それ以下でもない、まさに頂点
その差し伸ばされた腕の下をくぐる
あらゆる音が周囲から消え失せる
この都市の全てが、既に僕には無意味となっている

もやもやとした春の大気は、かすかに血の匂いがする
意味を荒捜ししようとする、苛立ちに満ちた血の匂いがする
自らの創造物に取り巻かれ、偏執狂と化した者の叫びが歯軋りする
都市そのものに締め上げられ、呻き喘ぎ、捻じ曲げられた叫びが！

この桜道（さくらみち）を行く人々の郷愁は、何処へ向けられるのだろう
譲り渡した五感
閉じ込められた肉体
眺望を失った精神
この世界は現在の人間にとって、物理的かつ概念的に狭すぎる・・・

無数に差上げられた内蔵カメラが貪るもの
それは我々の空腹を満たしはしても
記憶として生き続けることはない
あまりに惨めに消え失せる「時間」
いや、それともこれは自然が仕組んだ壮大な実験なのかもしれない

おお、我々の創造物であるクロ―ンの桜よ
お前たちはいつか進化の後、種子を実らせるがいい
そして我々の滅亡の後に伝えるのだ
この都市民族たちの春爛漫の息吹を

（2004.3.30）

小さな窓

車窓に映る彼女は小さな窓を覗き込んでいる
君は何を待ち受けているのか
時折ちらちらと私を窺う――その目
絶望の向こう側にある穏やかな海のような・・・

あらゆるものが提供される
あらゆるものが用意される
体験までも
心理までも

それら全てを味わい尽くそうとする――
そのことが共通の「目的」となっている
それなのに彼女の目は尋ねている
乾いた唇が尋ねている

「あらゆるもの、というからには
あらゆるものなのだろうけれど
でも、そうでないものを持っていないかしら？

あなたは、それをご存知ないかしら？」

あらゆる軌道上の探索が試みられている
その軌道を踏み外し、新たな軌道を辿ることも許されている
しかもなお、彼女は待ち受けているのだ
未知の領域に足を踏み入れる、その手引きをする者を

私はその眼差しを吸い取ってしまう
それだけが、今の私が返すことの出来る答えだとは情けない
彼女はそれを感じ、不満そうに小さな窓に目を落とす
洪水のように乱れ飛ぶ「あらゆるもの」に・・・

（2004.4.11）

意思という

意思という

脈絡のない意識の連なり

それを人々は意思という

積み上げられ製本された概念
現在に近いほど、その量は膨大になる

疲労しているのは我々ではない
疲労しているのは我々の費やした時間なのだ

置き去りにされ、膨大な「現在」に埋もれ
呼吸(いき)もできぬほど押し潰され、無意味に死んでゆく———

何と多くのものが僕を押し退けて声高に笑い叫んでいるのだろう
意思———という

装飾のかたまり
その中で沈黙する

意思という

(2004.4.20)

毒素

鳥が舞い降り
家々の間をすり抜けて再び空へ舞い上がる

目の前に並べられたものに伸ばそうとする手が止まる
それらを持たぬことが恥辱とされる所以は何だろう

無力を行使する
焦燥から生まれた力など棄ててしまおう

私に何ものかを与えることのできる者は、お前ではない
虚栄よ、お前でもない

新たな乱痴気騒ぎが準備されている
新たな暴走が煮え立ち、溢れ出そうとしている

お前が枯れ尽きようとする———
その最後のあがきによって生み出される毒素に狂わされて・・・

飽満の果ての回帰
野獣を押さえつけることによる平穏への唾棄

枯れ尽きさせてしまえ
我々個々の力で枯れ尽きさせてしまえ

（2004.5.3）

無題

遺すべきなにものもなく立ち去る———
そのことは何ら心残りではない
残された時間をどう過ごせばよいのか
そのことに身悶えする

ただ、流れ込んでくる音楽
何も共鳴せず、流れ込んでくるだけの音楽
演奏者は何を感じようとしているのか
私は、それらの輪の外に居るに違いない

この生命を捧げるべき何物もない———
匂やかで甘い果汁のような時間もない
全ては無機的な創造によってもたらされている
その計算の見事さを賞賛する声ばかりだ

全てをバランスよく摂取する———
それが健康を保持する秘訣だ
その中で個性を主張すること
それこそが「生きる」ことだって！

ああ、反吐が出る
浮浪者共さえ行儀よく感心する
「そうだ、個性の主張だとも」と・・・
高貴なものは何処に消えたんだ

どれもこれもみな同じ
あれもこれも、ちっとも違いはしない
誰もがそれに気付いていながら
己に低俗のレッテルを貼られることを怖れている

ああ、高貴であることを選ぶこと
その危険さを指弾する群衆たちよ
目を覚ますがいい
金持ちであることを選ぶことも同様に危険だと知れ

尊敬する必要などない、静かな世界
計算力を基準とした競争の容認
閨房にのみ閉じ込められた安全な生命
大衆に媚び、大衆を擁護する社会

遺すべきなにものもなく立ち去る———
そのことは何ら心残りではない
残された時間をどう過ごせばよいのか
ああ、そのことに身悶えする

(2004.5.3)

春の嵐

事実を味わうこと、と
暴風雨の隙間のない音の粒よ、生命を抱け
和することに
乾いた地面を潤すことに
激しい風の圧力よ、私に事実を叫べ
疑う余地のない事実とやらを

狂おしいものは何処にある———
無表情な時間ばかりが散らばっている
見え透いた涙を計算する芸術とやらが
押し付けがましく喚きたてる
地上と空の間に横たわる隔壁が雲を拒む
おお、狂おしいものは———何処にある

踊れ
行儀のよい社交ダンスじゃなく
伝統を緻密に伝える民族舞踊じゃなく
抑圧を押しのける気違いじみた運動じゃなく

大気を胸に迎えるための解放の舞踊を
踊れ

(2004.5.4)

窓外

薄い紗のかかった二次元の世界を
あたかもさまようように続く生活(くらし)
あなた方の感情など僕にはこれっぱかしも感じられず
ましてや社会など存在しないも同じこと――――

遥か遠くで僕とは無縁に動き回る世界――――
まるで顕微鏡から覗く、微生物の運動する世界のような・・・
それら微生物が生物界の底辺にあると知っていても
それが一体全体僕にとってどんな意味があるというものでもあるまい

堆く積み上げられたモノどもに埋もれて
自らの倦怠を、自ら無機的な興奮へと仕向ける毎日

あたかも他者であるかのような自己と向き合う日々
己という存在そのものが何かの創造物であるかのような錯覚

すべては私という部屋の窓外に広がっているだけのもの
この部屋の窓や扉を叩く者に、私は見えないのだ
僕自身も、この部屋の中を見せるなんて真っ平だ
自ら交雑など求める奴の気が知れない

あらゆる意味で距離の縮まりすぎた窮屈な空間では
現に様々な要因で衝突と侵害が生じているではないか
今、必要なのは、空間を超えた距離と自己保存であるはずじゃないか！
ああ、それを「壁」と罵る調和論者などに何がわかるのだ

僕自身の世界が容易に踏み倒される、そのことを
お前たちは「社会」という名のもとに擁護する――――
そんな実存破壊の権利など僕の知ったことか
この部屋に一歩だって踏み入れさせるものか・・・

見たいと思えば、世界の裏側まで目にすることができ
聞きたいと思えば、死人の声さえ聞くことができる――――

しかし、僕はうんざりしているのだ
それら全てが閉じられ、どうどうめぐりをしている感覚だ、と
今や孤独という宝石さえ不純物で濁らされ
どんな小さな部屋へも、盗撮と盗聴が忍び込み
情報として流出し、晒し者にされてゆく
ああ、社会というやぶ医者が施す治療などもうたくさんだ

だいたい、この硬直した空気を感じていないのか？
あらゆる自由を認可したおかげで生じた可能性の硬直化を！
新たな拘束と閉塞、そして二次元的な空間を！
飛翔する場所などどこにあるというのか？

おお、息の詰まるような世界！
この世界の外側には何もないのか
僕が胸の奥深く吸い込むことができるような清々しい空気は？
そして、遥かにかすむような眺望は？

今や残されたのは隠者となること、それのみだ
ああ、僕の道連れとなってくれる者はどこにも居ないのか

これほど声高な自由の謳歌の中にして
ただのひとりも・・・？

僕は、そっと窓のガラスを指先で撫でてみた
そしてしまいには、がんがんと叩いてもみた
その手ざわりは、ひんやりと冷たかった

窓外では、社会が嬉々として運動していた
まるで顕微鏡下の微生物のように
自由を謳歌していた・・・

おお、誰か、僕を助けてください
この非社会的な悟性にも友情は必要なのです
おお、誰か窓の中をのぞいてください

（2004.10.11）

Mesh-mass

幾何級数的に増大してゆくシナプス
いくつもの突起をもち
それらを繋ぎ
信号系統を無数に張りめぐらしてゆく
時には無機的な外部の情報網を取り込み
自らの周囲にはあらゆる種類のセンサ―を備える
その密度をどこまでも高めてゆく
まるであらゆる興奮を食い漁るかのように
シナプス達は目を血走らせている

そのMesh-massが肩をぶつけながら歩き回り
あちこちで衝突し
お互いの興奮を食い漁り合う
時には疲れ果てるまで
更には死に倒れるまで―――
そうした一触即発のMesh-massが歩き回る街

進化し、新たなセンサを開発しつつ

増殖するシナプスを
そのMesh-massは統御できない
最前線のシナプス達との連絡は途絶え
その増殖速度に追いつくこともできず
最前線で行われる外部情報網との接触も
それによって引き起こされる衝突も
巨大で無秩序な連合も
あまりに早すぎる・・・

Mesh-massは統御することができない
シナプスの進化が足踏みするまでは

（2004.10.16）

ある標本

透明な瓶の中にホルマリン漬けにされ
棚にずらりと陳列された
それらの標本たちの含み笑いが

不気味にも、また痛々しげにも
この部屋を満たしている

そのうちのひとつを取り出し
大きな机の上に置いてみると
それは見るからに憐憫を感じないではいられぬ――――
寂しげで、かつ憎々しげな笑いを固定していた

ある理念的な恭順を自らに強いるような
それでいて
感覚的な、おぼろげな虚栄に満ち満ちた
また、
幸福を得るための諦念に閉じ込められた
かつ
吊り下げられたモビ―ルのようにふらふらとした
そのような白々しい笑いを
あらゆる自己を裏切り、背信し続ける笑いを・・・

研究者によって死へと跨らせられる正にその時に
死への恐怖と痛苦を微塵も見せず

なぜこのような笑いが湧き出ることが可能なのか
研究者はどのようにしてこれを固定したのか
私は、いつまでもそれに見入っていた

すると、ふと
その瓶のあった場所に、
小さな紙片が置いてあったのに気付いた

それは私の疑問を払拭してくれるものだった
確かにそれは「居た」のだ、と

そこには小さな字で次のように
丁寧に記されてあったのだ

「超越的存在」

(2005.2.26)

料理

ぶつ切りを並べてみる
酢で締めてみる
それを焼いてみる
煮てみる
何と様々な、複雑な味――
しかし、不味い

調味してみる
塩
砂糖
胡椒
何と複雑な味――
しかし、不味い

嚥下してしまおう――
階調が交錯する
まるで加速器の中の騒ぎ
目の前を飛び交う粒子

平らげなきゃならないだろうか
この一皿を

（ううむ、
ちょっとすっきりしたかもしれない）

（2005.3.6）

ぶつぶつ

レトリック
レトリック
１０度
４５度
１８０度
２９０度
３６０度

ちょっと疲れたかしら

いっそストレートに――――
でも
この言葉って
どんな広がりがあったかしらん
こんな狭かったかしら
ま、いいわ
ストレート
ストレート

おやまあ
裏返すこともできるのね
しょせん記号の域ね

これはまるで吊り橋のよう
そこへ両方から歩いてくる、わたし
あやうげな言葉の橋
この「振れ」を捉まえるのよ
そうすると
この橋の上の
ふたりのわたしの視線が

奥深い世界を示すはず

それにしても
近ごろの言葉ときたら
狭苦しいわね

（2005.3.6）

足音

意思無きままになぞられる詩句がたなびく
それらを容易に惹きつけるであろうところの
生を忘却し、蹂躙する欲望無き興奮
その整然とした足音が遠くから近づきつつある

御前を抑圧する世界というものに目を伏せ
そこから、しかもそこへ逃亡するために破壊の限りを尽くす――――
そのようなものから湧き出る詩句が呼び出すものこそ
縛り首にすべき抑圧者そのもの

膚と膚がふれあうときの深い温かさを忘れたならば
自らの左手と右手をゆっくりと絡ませてみるがいい
殺戮と復讐で塗り潰されたその部屋へ
御前自身へと連綿と引き継がれた生命を解き放つがいい

近づいてくるあの足音に耳を澄まし
おお、手を携えて備えよ

（2005.8.8）

連と語る

じっと動かぬ木の
蛍光灯に照らされた葉裏の白さ
その輝きの
発生
束の間の生
そして消失

連続

連と連との間の空白において眠る者———
あなたを捉えること
霧が降るように降る
大気
その深い洞窟の底に潜む者

黒い天空に瞬く星に何を見ることができるか
夜は既に閉じられ
明けることを
その方法を知らない

連とは何か
あなたの生を時間と結ぶもの

一段
一段
それを区切るもの

階段として
あなたの生を
生の感触を呼び覚ますもの

おお、連よ
私の前に輝くこの葉裏の白さを
私の中に降らせよ

あの夜空に瞬く星々を目覚めさせ
夜そのものを動かし
これまでに失われてきた全てのわななきを
私に注ぎ込め

(2005.10.29)

無題

あらゆるものが暇つぶしとなり得る———

今や仕事さえもが暇つぶしになりつつある
特に情熱を注ぐ必要もなく
弱肉強食の世界では、欲望だけが意味を持つ
それが嫌ならフリ―タ―でもなればいい
それもだめならニ―トにでも

今や芸術さえもが暇つぶしになりつつある
特に心血を注ぐ必要もなく
技巧的な世界では、独創性だけが意味を持つ
あまりにバリエ―ションがありすぎて
どれも独創的とは言えなくなりつつある

今や対人関係も暇つぶしになりつつある
個と個ではなく
群れに加わるか否かだけが意味を持つ
個を求めて弾かれることを怖れる
唯一、肉欲に裏付けられたものだけが残る

メディアは暇つぶしのためにあらゆるものを提供する
選択可能とは言いながら

どのように選択すべきなのかは不明
それに
そもそも選択の必要などない

生活そのもの自体が暇つぶしになりつつある
ぬくぬくと収まって
独善的な世界に浸ることが保証され
孤独を感じることもない
部屋を開け放たない限りは

次第次第に蓄積されてゆく独善性が
部屋の中で醗酵しつつある
静かに
時折シュッと血生臭い蒸気を出しつつ
ゆっくりと醗酵しつつある

あらゆる暇つぶしの中で
様々なバリエ―ションが試される
ベント
ツウィスト

リバ―ス・・・

(2005.11.19)

独白

落ちるものがない
何もかも浮き、漂うばかり
沈むものがない
満たされているからではない

時間が意味を持つのは
ただ「死」という宿命においてのみ
それさえ忘れ去ることが可能である
時間は、限りなく無いに等しい

日が昇り
日が沈む
それは単なるリズムと解される

連綿と継続することであると

昨日
今日
現在
明日
明後日

存在とは見えることである、と
そのような定義が信じられている
あるいは
全てはア・プリオリである、と
その向こうはない、と

浮遊し
漂う
そのような生しかない
疑いもなく
そのように信じられている

私の前には
鏡に映る自分の映像がある
これは私を投影したものか
それとも
他の何者か、なのか

(2005.11.20)

無題

桜の葉が落ちている
どす紅く乾いた血のような色となって
桜の葉が散り落ちている

昨日も今日も明日もなければいい
人間たちと僕自身に強迫され続けるなら
時間など不要だ

生きる、などということは

厚顔無恥な君たちにお任せしたい
僕に生の意味を教えてくれなかった君たちに

桜の葉がまた落ちる
枝から棄てられてゆく
この枯葉の山の中でいつまでも暮らしたい

僕らにしか見えないものがある
君たちが嘲笑する僕たちにしか見えないもの
君たちが目をそむけて忌み嫌うものが

それらを押し付け
自壊とともに消えてゆくことを願う———
君たちは、そういう者たちだ

汚らわしい裏切りに満ちた生
社会という名の裏に隠された排除の論理
欲望を満たすための秩序の論理

君たちは感じないのか

僕たちが未来を予見し、体現していることを
ああ、鎧を身に着けた君たちには

思い返してみるがいい
宝石のように静かに光る小さな家を
何気なく通い合う街と社会を

次なる犠牲は君たち自身であることを知れ
人間を食い漁り、肥大化してゆく社会
もはや制御不能の社会という名の独裁者の犠牲に

我々は再び始めようとしている
借金を帳消しにするための野望を
今度の大義名分はいかなるものとなるだろう

それは次第次第に降り積ってゆく
その自重によって変異してゆく
粒子同士のせめぎ合い

爆発して塵となるか

重力を道連れにしながら沈み続けるか
死が生となり、同時に死が継続する

僕たちは退化を選んだ者である
君たちが望んでいる未来を拒絶する者である
誰かが止めなければならない

桜は眠りの中へとこもる
もう目覚めてはならない
時間など不要だ

(2005.12.3)